♪「川島素晴 plays… vol.2 “無音”」 ぶらり訪問記♪

2020 年 8 月 1 日（土）午後 4 時 4 分 33 秒開演　会場：旧東京音楽学校奏楽堂

今回は、コロナ禍の中で風変わりな「無音」のリサイタルの紹介です。

JR 上野駅公園口から、東京文化会館を左手に国立西洋美術館を右手に見ながら進むと上野動物園入り口に出ます。（関東地方が梅雨明けし気温が上がる中、間隔を空けて入園を待つ家族などの列ができていた）そこから上野公園の噴水のある方向に曲がり、噴水の終わり辺りで左折すると会場がありました。周囲は公園で空間や樹木もたくさんあるのでジージーと鳴く蝉の声が広がっていました。

写真：会場入り口　8/1 日撮影

旧東京音楽学校奏楽堂の歴史（ホームページより一部転記）

東京芸術大学音楽学部の前身、東京音楽学校の校舎として、明治 23 年（1890）に建築され、日本における音楽教育の中心的な役割を担ってきました。

2 階の音楽ホールは、かつて滝廉太郎がピアノを弾き、山田耕筰が歌曲を歌った由緒ある舞台です。

建物の老朽化が目立つようになり校舎の移設構想の中で、昭和 58 年（1983）に台東区が東京芸術大学から譲り受けることになります。そして、昭和 62 年（1987）に現在の地へ移設・復元し、「旧東京音楽学校奏楽堂」として一般への公開を開始しました。

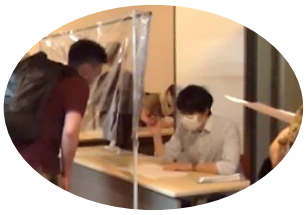
さらに、昭和 63 年（1988）には、重要文化財の指定を受けました。平成 30 年（2018）11 月にリニューアルオープン。（詳しくはホームページでご覧ください）

※新型コロナウイルス感染防止のため、臨時休館していましたが、一般の見学などが 6 月 26 日より再開、ホールは 8 月 1 日より利用再開されました。（編集部）

感染予防対策

① チケット（入場券）の発行はなく、申し込んだ人は、メールに添付され送られてきた「チェックリスト」をプリントし、氏名、電話番号、チェック項目（9 項目）に記入した用紙を受付に提出しました。

② 受付の様子（右の写真）、にわか作りではあるけれどもビニールシートで仕切られていました。その先には検温係りがいて測定器を額に近づけて測っていました。その隣に置かれた消毒液を使い各自手に擦り込んで入場します。



③ 手に触れるものを極力減らす目的で、プログラムの配布はありませんでした。（着席可の席には、曲目のみのチラシが置かれていました）

代替えとして、主催者がブログ上に載せた解説を見ながら鑑賞できるようにと、スマホ、タブレットなどは持ち込み可となっていました。（撮影なども可となっていたけれど、使用時音が出ないようにとの注意がありました）また、着席できる椅子にはチラシが置かれ、使用不可の席は左の写真のように１つ置きにスズランテープで座席が倒せないように縛ってありました。

始めに　主催者（川島素晴氏）のリサイタルに寄せての言葉をブログから紹介。
2020 年 3 月 24 日、リサイタルのシリーズ「川島素晴 plays...」を始動しました。
初回は、「川島素晴 plays...vol.1“肉体”」。
毎回異なる題材によるリサイタルという、恐らく前代未聞のリサイタルシリーズですが、その第２弾は、「川島素晴 plays...vol.2“無音”」。となります。（中略）
実はこの内容、昨年から（中略）「オリンピックの喧騒を離れて、静寂に耳を澄ませませんか？」という趣旨で計画しようと思っていたのです。

ところが、オリンピックは、いみじくも初回のリサイタル当日（3/24）に延期が決定。そしてその後、ほぼ全ての音楽会が中止や延期となり、文字通り、音楽の世界では「無音」状態が続きました。（中略）
このような中での「無音」の企画というのは、はからずも、まことに時宜を弁えたものと申せましょう。《4′ 33″》以前と以後の「無音」作品を歴時的に選曲、様々な角度から「無音」のあり方を体験する 2 時間の内容となります。（後略）

＜出演＞無音：川島素晴　アンサンブル東風（アレー、クライン、川島作品賛助出演）
Fl:姫本さやか　Cl:大成雅志　Fg:依田晃宣　Hr:堂山敦史　Vn:花田和加子、古川仁菜
Vla:中島久美

それでは、プログラムの作品からいくつかを紹介します。

開演前のステージの様子

ここ！ スリーンに曲目や映像が映し出される。

最初の作品は、「アルフォンス・アレー（1854-1905）／偉大な聴覚障害者の葬儀のための葬送行進曲（1884）」

フランスの作家、アルフォンス・アレーは、ブラックユーモアを盛り込んだエスプリのきいたコントを多数書いた作家として活躍しました。（ブログより一部を転記）

舞台上のスクリーンにストップウォッチと指揮者（川島素晴氏）の顔が映し出され、ストップウォッチは 4′ 33″ に向けて刻々と刻み続ける。
時刻の数字が次第にズームアップされると、ぼやけるように川島氏の顔が消え 4′ 33″

でスクリーンから全てが消える。すると演奏者が舞台に登場し着席します。その後指揮者はマスク着用で登場して一礼（会場は拍手）し指揮を始める（腕を動かす）。演奏者も動き始めるけれども無音のまま演奏。（パントマイムを見ているようです）

次に紹介する作品は、「エルヴィン・シュールホフ（1894-1942）」《五つのピトレスク》より第３曲「未来にて」（1919）

譜面を見ていただくとよくわかるのですが、セキュリティーの関係で以下ブログから文字で紹介します。
譜面は全てが休符で満たされているのです。それにもかかわらず、発想標語として、「曲を通じて常に自由な表情と感情をもって」と書かれており、また、「？」や「!!」に加え、安らかな顔音符が 2 カ所（※音符の白〇の中にスマホで使われるような顔の絵文字の音符、1 か所は「シ」の位置に、2 つ目は譜面の最後で「レ」の位置に書かれている。：編集部）そもそも、上の段がヘ音記号、下の段がト音記号になっているのも普通ではありません。
拍子記号も意図的に意味不明なもの（上の段が 3/5、下の段が 7/10）が表示されています。（実際には、顔音符以外の箇所は全て 4/4 拍子で記譜されています。）※ここまで転記。
川島氏はこの譜面を演奏します。
ブログには、左右の手を交差して停止するところの動画があるけれど、これは「譜面通り」だそうです。（写真のような形になる）この曲もしぐさだけで無音で進行します。

次に紹介する作品は、イヴ・クライン（1928-1962）交響曲「単音ー沈黙」（1949）
ブログより紹介すると、インターナショナル・クライン・ブルー（ＩＫＢ）という独自のブルーを開発し、その色一色による様々な作品を作ったことで知られる。（ここまで転記）
スクリーンに青色（ＩＫＢ）を投影して演奏します。

演奏者の前に指揮者が登場すると会場から拍手、演奏が始まると音は出すけれども、同じ音がいつまでも続きます。クレッシェンド、デクレッシェンドの抑揚はあるので指揮者は両手を上方に上げたり下げたりの指揮をするものの、旋律やリズムを感じることはなかった。（弦楽器奏者はマスク着用）同じ音を 20 分続けたところで、指揮者が両腕を上方に上げた状態で手の動きが止まり音も止まります。演奏者は演奏していて指揮が止まったときの状態を維持した姿でストップ。（全員凍り付いたようになります）

しばらくすると弦楽器奏者は楽器から弓を離し楽な姿勢に、管楽器奏者は口から離しマスクを付けます。
演奏者は下の写真ようにそれぞれ少し楽な形を続けるが指揮者は固まったまま。（音が無くなってから 20 分ぐらい続いたと思う）そしてこの曲は終了します。

音の出ていた 20 分程度だけでも良いように思うけれど、その後の沈黙の 20 分は、客席のみんなも青色を音で感じてみてくださいと語りかけているようでした。

次に紹介する作品は、
「視覚音楽Ⅰ」
五線紙に書いてあるのは、4 分 33 秒この五線紙を見続けなさい
※一定の箇所を 4 分 33 秒間見続けるか様々な個所を 4 分 33 秒間見続けなさいの二つのことばだけです。その演奏の様子が右の 2 枚の写真です。（腕を組んで見つめたり、譜面を手に持って見つめたり・・・）

次に紹介する作品は、松平敬／心の中で歌う（2020 / 舞台初演）
ちょっと長文になりますが、以下ブログから一部転記させていただきます。

本来このリサイタルは、「オリンピックの喧騒を離れて静寂を楽しみましょう」との意図で、昨年から計画していたものでしたが、新型コロナウイルスによる感染が世界的に拡大するという未曽有の事態に、あらゆるイベントが中止や延期を余儀なくされる世の中に様変わりしてしまいました。
《心の中で歌う》はそのような状況下に誕生した作品です。
もちろん、昨年来あたためてきたこのリサイタルの演目としては予定していませんでした。しかし、こういう状況だからこそ、このような作品を、いち早く取り上げることに意義があると考え、上演することに決めました。（中略）

名古屋市教育委員会は各小・中学校に６月１日からの授業再開にあたり、学校での新型コロナ対策について具体的に通知を出しました。
座席は児童・生徒の間隔を確保するため少しずつずらして配置し、それぞれの間に１ｍの距離を確保するよう求めています。
音楽の授業では鍵盤ハーモニカの代わりに卓上木琴などを代用したり、飛沫が飛ぶため実際に歌を歌うのをできるだけ避け、ＣＤを聴いて心の中で歌ったりハミングする活動を取り入れるよう求めています。（中略）

音楽関係の中でも一番ダメージが大きいのが声楽です。
合唱でのクラスターも報告され、この状況下で今、最も神経質にならざるを得ない状況であることは確かです。
ですが、心の中で歌うことを強いるのが、音楽教育として成立するのでしょうか。

このような状況への批判、皮肉、警鐘、自虐…様々な意味が読み取れる作品を、すぐさま発表したのが、バリトン歌手の松平敬さんです。（中略）（彼は、…中略…本作のような実験的なテキスト譜のみならず、様々な様式の音楽を「書く」技術も持たれております）。（ここまで転記）

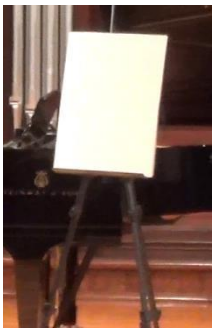
演奏の様子

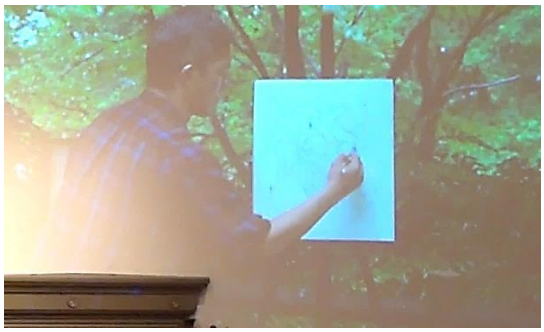
会場に松平敬氏がおられ、この曲の終わりに紹介されました。

次に紹介する作品は、
ささきしおり　ユビキタス“Ｓ”（2020 / 委嘱新作初演）
ブログより紹介・・・ささきしおりは普段、「ドローイングサウンド」を軸に活動をしています。そもそも、筆記による音響を音楽と称して活動している時点でかなり異色ですが、その彼女に、敢えて無音の作品を、とのお題を出しました。

今回のチラシは、イヴ・クラインへのオマージュとして描かれた彼女の作品であり、このビジュアルイメージが、今回の新作の基になっています。（ここまで転記）

■作曲者本人のコメントから一部転記・・・（前略）私がこれまで行ってきた「描線の音楽」とは「”描く行為”とは”演奏行為”である」を起点に、「ドローイング」によって音楽を拡張していけるのではないかと考え行ってきたパフォーマンスを総称し名付けたものである。

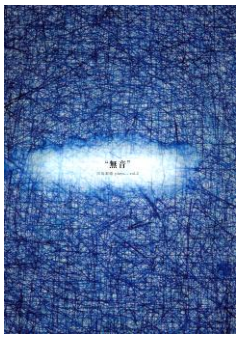




作品の方向性は「音を刻む」ものから徐々に「時間を刻む」ものに変化してきており、本作もまた「時間を刻む」タイプのものである。（後略）

舞台には白紙のキャンバスが置かれ、スクリーンには、樹木の中で一心に青色の線画を描く川島氏の姿が動画で写しだされ、ホールにはセミの鳴き声が流れている。（きょう上野駅から会場まで歩いてきた上野公園が浮かんできました）

しばらくすると、川島氏は舞台に登場し舞台上に置かれた白紙のキャンバスに線を描き始める。スクリーンの中でも川島氏は描き続けているので、スクリーンに映し出された用紙は次第に青色の線で埋まっていきます。チラシほどではないけれど、映像は線が密になったところで終了します。その後も舞台上では描き続けしばらくして全て終了します。舞台上のキャンバスには、実際には線は描かず、描くしぐさだけだったので白紙のままで終わります。



チラシ▲

次に紹介する作品は、

川島素晴　Exhibition 2020（2020/新作初演）・・・以下ブログより転記

この《Exhibition》のシリーズは、私自身が大学に入学する以前から実践していたコンセプトで、「複数の楽器奏者が、指定された音、姿勢、場所で、20～30 秒程度、一つの響きを演奏する」ことにより、それぞれの響きを「作品」として提示するものです。

（中略）

これまでの上演では、いずれの場合も、コンサートのプログラムの合間に挿入するようなかたちで上演してきました。（中略）しかし今回は、敢えて、連続上演したいと思います。しかも「無音」版です。

《Exhibition》シリーズは、「一つの響きの提示が作品」という主張そのものが、他にない形態であり、それじたい、音楽の枠組みを揺らがせるものと自認していますが、その《Exhibition》を無音で上演したら、これは果たして「音楽」といえるのだろうか…？
繰り返しますが、《4′ 33″》は、実は「音を聴く」作品です。そして、「時間体験」を強く意識した作品です。

この《Exhibition》においては、環境音を聴いてもらう、という意図はありません。純粋に、演奏者たちの立ち位置、姿勢等の配列を「作品」として鑑賞して頂くことになります。むしろそこから、「時間概念」を取り払い、美術作品の鑑賞と同じような感受の仕方をして頂きたいと思っています。(中略)
私にとって、演奏家の身体がそこに存在するということで、充分「音楽作品」なのです。かねてより「action music（演じる音楽)」ということをテーゼとして掲げて創作活動をしてまいりました。音は、音としての物理振動であるより前に、発音行為の帰結としてあるものです。(中略）そのような前提に基づく試みが、本作品となります。（ここまで転記）後略。

それでは、作品を観て?（聴いて？）みましょう。
1）葬送（数十秒間同じ姿勢で動かない。2）以下も同様）

2）未来にて

3）人体測定

6）アトモスフェール（リゲティの代表作で、管弦楽作品の題名。しばしば「大気」のように訳されます）後日、川島氏から雰囲気という意味合いに読み取り表現したとお聞きしました。川島氏（左の写真の左端）が指をパチンと鳴らしたところで終わります。

7）チープ・イミテーション

8）存在について（上記 6)、7)、8）の写真は、それぞれ舞台の上手と下手の様子）

9）ソーシャル・ディスタンス

指揮者がもっと広がるようにと指示して、出来るだけ隣りとの間隔をあけ、舞台いっぱいに広がった演奏の姿（これはわかり易い）

10）遍在…最後は、出場者全員舞台から客席に下り、思い思いの席に散らばります。そうしてリサイタルは終了となりました。（文責：編集部）

■途中 20 分の休憩がありましたけれど、客席や会館内での会話は避けるようにとのお願いもあって、お客さん同士の会話も聞こえない拍手だけの不思議な 2 時間でした。機会があればまた鑑賞したいと思いながら、せみ時雨の中上野駅へと向かいました。